

## 文禄・慶長の役研究の学説史的検討

中野等\*

はじめに

- I 近世前期の日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の位置づけ
- II 近世後期の日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の位置づけ
- III 近代日本の成立と「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)
- IV 敗戦以降八〇年代にいたる研究動向
- V 関心の多様化と問題点

### はじめに

いわゆる「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)と称される戦役に対し、どのような名称を与えるかという議論自体がすでに「学説」史をなすともいえる。同時代の史料には「唐入り」「大明へ御道座」といった表現が見えるが、近世の初頭には堀正意の『朝鮮征伐記』に代表されるように、「唐入り」は「朝鮮征伐」という言説に置換されていくようである。このほか「朝鮮陣」「高麗陣」「征韓」といった言い方も多く行われる。いずれにしる、「征明」などのように中国の存在を前提とするより、「朝鮮」「高麗」などを冠して戦役を呼称することが一般化する。近代に入って、朝鮮半島が植民地化されていく過程で「朝鮮征伐」や「征韓」などという言い方は避けられ、「文禄の役」および「慶長の役」という言い方が用いられ、総じて「文禄・慶長の役」という呼称が定着する。無論こうした表現は日本における(ないし日本から見た)ものであり、韓国では一般に「壬辰倭乱」「丁酉再乱」、中国では「抗倭援朝」あるいは「万曆朝鮮役」、「万曆日本役」といった言い方が一般的であるとされる。

そののち六〇年代に入ると、朝鮮半島への派兵が「侵略」行為であると強く意識されることになり、日本では「朝鮮侵略」という呼称が盛んに用いられるようになる。そうした一方で、日本はもとより韓国・中国における豊かな研究蓄積をも踏まえつつ、戦役の名称についても再考すべきとの提案もなされるようになった。たとえば、貫井正之氏は豊臣秀吉の対外的な征服意図全般を踏まえて書名に「海外侵略」の文言を採用し(『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』、青木書店、一九九六年)、中野は派兵の目的はあくまで明国の征服にあったとして「大陸侵攻」と称すべきとする(無論、「大陸」には朝鮮半島も含まれる。『秀吉の軍令と大陸侵攻』、吉川弘文館、二〇〇六年)。また、李啓煌氏も戦役の名称につ

\* 九州大学大学院比較社会文化研究院教授

いては具体的言及がないものの、この戦争が東アジアの全域にかかわる「国際的戦争」であったと位置づけられている(『文禄・慶長の役と東アジア』、臨川書店、一九九七年)。

いうまでもなく、名称に対する再考は、この戦争の「一国史的理解」を見直そうとする流れとも関連している。すなわち、この戦争を改めて「東アジア三国戦争」という観点から再検討しようとする国際学术会议は、戦争の名称を「壬辰戦争」とすべきではないかとの提言をおこなっている(鄭杜熙・李璟珣編著『壬辰戦争』、ここでは金文子監訳・小幡倫裕訳の日本語版を利用。明石書店、二〇〇八年)。このように、最近では、日本、韓国、中国に共通する名称を案出すべきではないかとの議論もあるようであるが、戦役の名称が歴史意識の反映である以上、それも決して容易なことではあるまい。

いたずらな混乱をさける意味から、ここではそうした現状認識の披瀝にとどめ、戦役の名称については二〇〇五年十一月刊行の『日韓歴史共同研究報告書』第2分科篇(以下、『共同報告書』と略称)に従って、ひとまず「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)を採用することにしたい。

さて、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に関する学説史については、『共同報告書』において、すでに主題ごとにきわめて周到な整理が行われている。そこで、ここではその成果を踏まえつつ、雑駁ではあるが時系列的な関心からの検討を試みたい。

## I 近世前期の日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の位置づけ

まず、さきの『共同報告書』でも十分な論究がなされていない近世日本(江戸時代)における学説史について、前後期に分け簡単にまとめておく。こうした関心からは、すでに先学による一定の整理が試みられている。たとえば、三鬼清一郎氏には「江戸時代における朝鮮役の評価について」(『歴史評論』三七三号、一九八一年)があり、また北島万次氏は『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』(校倉書房、一九九〇年)第一章「豊臣政権の朝鮮侵略に関する学説史的検討」の第一節をそれにあてている。ここでもこれらの成果に学びつつ、論述をすすめていく。

近世日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の語られ方を考えていく上で、まず問題とすべきは豊臣秀吉の伝記類、すなわち諸「太閤記」本であろう。

\* 近世日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の記憶と記録という観点から考えると、直接であれ間接であれ、まずこの戦争を実体験した世代とそれ以降の世代とに分けて考えることができよう。たとえば、「宇都宮高麗戦帰陣物語」や「梨羽紹幽物語」などは実際に従軍した経験を記録化したものであり、史料としても重要であるが、学説史の整理というここでの作業にはなじまないもので、こうした覚書類についてはとりあえず除くこととする。

様々な秀吉伝記の中で「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)にまとまった記述を残しているのは、「信長公記」で知られる太田牛一の「豊国大明神臨時御祭礼記録」、および小瀬甫庵の「太閤記」であろう。太田牛一には秀吉伝記として「大かうさまくんきのうち」が知られるが、「豊国大明神臨時御祭礼記録」はその続編という性格をもつ。「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)について「大かうさまくんきのうち」でまとまっ

た記述もおこなっていないが、「豊国大明神臨時御祭礼記録」言及して、度重なる戦争に日本は一度も負けなかったとして秀吉の功績を称えている。ついで、寛永三(一六二六)年に成立したとみられる小瀬甫庵の「太閤記」(以下甫庵「太閤記」)は「凡例」に「秀吉公の事も、善を善として悪を悪として記之」とみえる通り、秀吉の事績を手放しで賞賛するだけではない。その本質は当時勃興の儒学思想に基づく史論書というべきであり、必ずしも史実の穿鑿を目的とはしていない。それどころか、引用古記録は簡素化・平易化され、さらに古文書にいたっては儒学的立場などによって改竄され、創作されたと考えられるものすらある。「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に即していうと、1)前後二度行われた晋州城合戦を「合体」させて叙述 2)慶長二年「巨濟島(唐島)合戦」を文禄二年のものとする 3)慶長二年の蔚山合戦を文禄三年のものとする といった点が指摘され、結果的に「文禄の役」と「慶長の役」との区別が不分明なものとなっている。こうした点について、最近の柳沢昌紀氏の研究成果によると(「信長公記と信長記、太閤記」、堀新編『信長公記を読む』所収、吉川弘文館、二〇〇九年)、甫庵「太閤記」は太田牛一の「豊国大明神臨時御祭礼記録」的史観を踏襲したものであり、いわば牛一太田が描いた「見取り図」を体系的・疑似「実証的」に編纂したものとされる。このように「史料」としては致命的問題を抱えつつ、甫庵「太閤記」これ以前の秀吉伝記本に比べ圧倒的に高い完成度・体系性をもち、その叙述スタイルもほぼ編年体の形をとる。内容的にも史実を明快に裁断統制するという、一種の具体的教訓書として受け入れられることとなる。結果、あたかももっとも信頼に足る秀吉伝(秀吉の正伝)であるかのような位置づけうけ、同時代はもとより、後世にいたっても圧倒的な影響力を示すこととなる。

「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に限ったとき、甫庵「太閤記」に比肩すべき位置をしめるのは堀正意の「朝鮮征伐記」である。その成立については従来中村栄孝氏の主張された寛永中期説が有力であったが、最近はウィレム・ブート氏によって慶長末年から元和初年には成立していたのではないかとの説が唱えられている(『朝鮮征伐記』に描かれた戦争一戦後のある日本人儒学者の視線からみた秀吉一、鄭杜熙・李璟珣編著『壬辰戦争』所収)。その内容は表題に明らかなように朝鮮出兵を中心とした秀吉の伝記であり、また朝鮮出兵を対象とした軍記物とも考えられる。その印象的な特徴として、多くの挿絵と平仮名交じり文であげられ、漢語にはフリガナが施されている。したがって、本当に儒学者の著作かとも思わせるものがあるが、この点についてウィレム・ブート氏は、本来のテキストは漢字とカタカナ文であり、堀正意には出版の意図がなかったのではないかと推察されている。それはともかくとして、この「朝鮮征伐記」は朝鮮出兵をあつかった最古のものであり、対戦国とりわけ中国側の動向に詳しい本格的な内容となっている。この点に関しては万曆三四(慶長一一・一六〇六)年に中国で刊行された「兩朝平攘録」の活用が認められる。講和交渉と「慶長の役」についても詳述されており、この点を有耶無耶にした甫庵「太閤記」的な叙述は、ここに否定された。ただし戦争本来の目的であった「大明国征伐」は何の説明もなく「朝鮮征伐」に転化しており、この点については今後細かに検証していく必要があるように思われる。

しばらく時期が下がると、薩摩島津家の「征韓録」があげられる。「征韓録」は藩主島津綱久の命により万治年間から家老島津久通を総裁として編纂されたものである。関係する古文書・古記録の収録はもとより、編纂にあたっては実際に従軍した家中の古老に対しても聞き書きを行っており、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の記憶と記録という観点から見ても注目すべき成果である。島津久通は跋文で「近

代吾祖従朝鮮征伐、振威武於異域、立功業爾邦家、而令名遍四海」とするが、主に島津義弘および久通の祖父にあたる島津図書頭忠長らの武功顕彰に厚い。ほぼ同時期の藩主家顕彰という点で共通するのが、筑前黒田家の「黒田家譜」である。寛文一一(一六七一)年藩命をうけた貝原益軒が「黒田家譜」の編纂を開始、延宝六年には「黒田家譜」一・二巻が成立し、さらに天和元年改訂がおこなわれた。「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)は巻之六から巻之八に至る。その内容は朝鮮における藩祖如水・長政の顕彰に主眼がある。記述の中で「朝鮮」を「征伐」という表現は出てくるものの、益軒は戦争そのものには懐疑的立場を取っており、戦争のもつ意味合いについても判断保留というべき態度である。すなわち、これら家譜編纂・藩祖顕彰にあつては、言葉としては「朝鮮征伐」という表現が採用されてはいるが、叙述の関心はもとより対象人物の顕彰にあり、「朝鮮征伐」の言説を積極的に定義付けようとする姿勢は感じられない。

さて、「朝鮮征伐」史観の近世日本における定着を考えていく上では、むしろ山鹿素行の著作を忘れる訳にはいかない。延宝元年(一六七三)成立の「武家事紀」は、その名の通り武家の実事をまとめた書物であるが、日本において初めて古文書をひろく歴史研究に用いたものとしても知られる。その実証性・合理性を支えるものが「古案」と呼ばれる文書集である。ここには織田・豊臣・神君・今川・武田・北条・長尾(上杉)・毛利その他の諸家文書をおさめるが、豊臣家古案の下、巻三十一は事実上の「朝鮮出兵関係史料集」となっている。その一方で、素行は日本中朝主義(日本中華主義)を唱え日本こそ「万邦に冠絶する国」とした。そこでは、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の総括も「秀吉、晩年ニ及テ朝鮮ヲ征伐、其勇胆、古今ニ拔出ス、凡朝鮮ハ本朝ノ属国藩屏タルコト、往古神功皇后三韓ヲ征伐セラレシヨリコノ方、代々其制旧記ニ明白也、(中略)故ニ秀吉朝鮮征伐ノ催ヲナシ玉フ、秀吉薨逝ニ因テ、其功不全トイヘトモ、本朝ノ武威ヲ異域ニ赫コト、神功皇后以降、秀吉治世ニアリ」というものになる。日本中朝主義のもと、朝鮮を日本の属国と位置づけることによって、「朝鮮」と「征伐」との間あった座りの悪さが一挙に解消したといえよう。

ついで京都の医師、松下見林が「異称日本伝」なる書を編む。「先哲談叢続編」によると、「見林、毎年人をして長崎に往き、舶來の書籍を購求せしめ、而して自ら之を閲し、亦子弟をして之を讀ましむ、故に其儲藏する所、彼我を兼并して殆んど十萬卷あり、未だ熟知せざるの人と雖も、就て借覽を請ふ者あれば、親疎を言はず、之をして専ら其欲する所に従はしむるのみ、敢て愛吝の色なし」とある。元禄戊辰(元年・一六八八)九月己亥に書かれた自序によると、「異称日本伝」の「異称」とは「諸異邦之人称之之語也」の意である事が分かる。すなわち、「異称日本伝」はかつての異邦人が「日本」をどう記録したのかという関心に従って、まとめられた書物である。「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)については中国の「皇明実記」「両朝平攘録」「図書編」や、朝鮮の「懲毖録」などを徴し、関係史料が編まれている。「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の意義について主体的に論じると行った性格の書物ではないが、この戦役に関係する在外史料が網羅されるたことの意味は大きかろう。

\*「異称日本伝」にも採用された「懲毖録」は元禄八年に至って日本で刊行されることとなった。ここには、福岡藩儒貝原益軒が序文を寄せており、そこには「伝曰、用兵有五、曰義兵、曰応兵、曰貪兵、曰驕兵、曰忿兵、五之中、義兵与応兵、君子之所用也、伝又曰、国雖大、好戦則必亡天下、雖安、亡戦則必危、好与亡二者、可以不戒守哉、曩昔、豊臣氏之伐朝鮮也、可謂貪兵兼

驕与忿、不可為義兵」とある。益軒は戦争を義兵、応兵、貪兵、驕兵、忿兵の五つに分けた上で、秀吉による朝鮮派兵を貪兵・驕兵・忿兵であるとして、義兵とは位置づけておらず、明確に否定的な立場をとっている。ちなみに、「懲毖録」の著者柳成龍は日本の侵攻時、宣祖のもと左議政兼兵曹判書を勤めた人物であり、その後失脚するが平壤回復後には領議政として復活し、京畿黄海平安咸鏡道体察使を兼ねた。「懲毖録」はそうした政府高官としての立場から、この戦役全般を論じたものであり、執筆の目的は「予、それを懲りて、後のわざわざををつつむ」ことにあった。朝鮮王朝は国家機密の流出を恐れて、「懲毖録」の日本での出版を嫌ったが、こののち流出は根絶される事はなかった。日本では「懲毖録」を得ることによって「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の朝鮮側に関する記述は総合的となり、詳細化していくことになる。

近世中期に入ると、正徳度通信使の応接を担当した新井白石や近世国家の自立を希求した荻生徂徠らがそれぞれの著作で「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に關説するが、紙幅の関係もあるのでここでは深く触れないこととする。

## Ⅱ 近世後期の日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の位置づけ

一八世紀後半、この問題に関わって影響力のある論陣を張ったのは本居宣長である。宣長の歴史研究は「古事記伝」に象徴される古代研究が中心ではあるが、ほぼ同時期の著作として安永六(一七七七)年十二月に成稿し、寛政二年に刊行された『馭戎慨言』が知られる。この書名は中国・朝鮮を西方の野蛮「戎」とみなし、これを万国に照臨する天照大御神の生国である我が国が「馭めならず」、すなわち統御すべきものとの立場に由る。従って、その内容は日本中心主義と尊内外卑に立って中国・朝鮮との外交交渉の歴史を慷慨したものとなっている。二巻四冊の構成をもつが、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)は下之巻下全編に亘っており、その比重はきわめて高い。両朝平攘録・懲毖録など中朝の史籍も踏まえているが、戦争の全過程を細かに見ていくというより、講和交渉の過程や外交文書の文言等を細かに論じる事に力点をおいている。そういった意味で、著作の目的が国学的正名論をただす事であったことは明白である。また、この戦が見るべき成果もなく秀吉の死によって終結したのは、秀吉がみずからの威勢に頼って戦をはじめ、神功皇后の神助を得ようとしなかったことに原因があり、いたずらに罪亡き朝鮮の民衆を殺戮したことも神功皇后の神意に背くものがあった、という議論を展開しており注目される。すなわち、これまで神功皇后による「三韓征伐」については、秀吉による朝鮮派兵の先駆をなすものとして、両者の関係は順接的に論じられてきたが、ここに至って秀吉の外征は遠く神功皇后のそれに及ばないものとの論断されている。さて、この『馭戎慨言』については、さきにみた『異称日本伝』の抜き書きのようでもしらくないという評価も下される一方、宣長の医学の師である武川幸順は感銘して時の摂政九条尚実への献上を試み、漢学者の間にもおおきな反響を影響を呼んだ。しばらくさきの事になるが、国学の正統な学統を論じようとした「学統弁論」(安政四年・一八五七年・九月序)のなかで大國隆正は、本居宣長を評して「この人の篤学古今に比類なく、てにをはの三転を發明して『詞の

玉緒』を撰しは語学の開祖といふべきなり、『馭戎慨言』に護国のこころざしをあらはし、『玉銚百首』に、わが学意をのべられしとぐひ、他人の及ぶところにあらず」とした。

さて、一九世紀にはいると、宣長没後の門人である伴信友は日本と中国・朝鮮・蝦夷・琉球などの異国・異域との交流史を国学の立場から論じて、『中外経緯伝』を著す。『中外経緯伝』は古代日朝関係、儒仏の日本伝来、義経北方伝説、為朝渡琉伝説、日琉交渉史、朝鮮出兵、琉球征伐などの項目からなる全六部構成であり、巻二の途中に「文化三年十二月 伴信友稿」とみえる。本編に朝鮮出兵の経緯が略述されるが、むしろ重要なのは『中外経緯伝草稿第四』から『同草稿第六』の部分であろう。すなわち、それぞれが「征戎遺文類第一」から「同 第三」にあたる。「征戎」なる表現は師である宣長の「馭戎」を踏まえたものであろうか。いずれにしる、「征戎遺文類」は「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に関わる古文書集の体をなす。収録史料は甫庵「太閤記」など出典とするものもあるが、中には諸藩の家中の家に伝来した文書なども数多く引かれており、今後史料収集の過程を復元していく作業が必要であろう。

また、経世家として知られる佐藤信淵は同郷(出羽秋田)の国学者平田篤胤と関わっていく中で「日本書紀」「古事記」などの古典に基礎をおく独自の国家観を形成する。ここでの関心からいうと、「宇内混同秘策」において大陸侵攻を論じるが、出雲松江や長州萩から朝鮮半島の東海岸を経略し、また博多からは朝鮮半島南岸を攻略すべきという具体案までを提示している。

伴信友や佐藤信淵らと同時代の文化文政期には、頼山陽「日本外史」の中で「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)が大きく取り上げられることになる。山陽は広島藩儒の家に生まれ、国学の影響も受けたといわれ、さらに陽明学者の大塩平八郎との親交があった。彼の歴史思想は「名分と時勢との二元論的立場」とも評されるように、儒学的思想要素である「名分」を基軸にしなが、非儒学的な「時勢」という思想要素を組み込んで歴史認識を進めようとした。「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に関する叙述は「太閤記」「朝鮮征伐記」「朝鮮軍記」「朝鮮物語」「清正記」「懲咎録」など内外の軍記物語を素材として漢文に仕立てたものである。ただし厳密な考証の成果ではない為、今日から見ると内容的には多くの誤謬も認められる。したがって、歴史叙述というより一種の文学作品と評すべきものともいえよう。織田家の部将であった頃から、秀吉は信長の為に「韓及び明を攻めんことを請ふ」ていたが、その後「豊臣氏の時に至り、明の民或は来り投ずる者あり、明主朱翊鈞(神祖・万曆帝)の政を失ひ、武備の具らざるを聞き、益々これを窺はんと思ふ」とある。「日本外史」自体、人物中心の記述であるが、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)でも加藤清正と小西行長の対立が殊更に強調されている。たとえば、「行長、清正を嫉む。清正、三成に悪くして、行長、これに善し。ともに俱にこれを譖す」という具合であり、石田三成を絡ませることで、清正と行長の対立を「関ヶ原合戦」の伏線に位置づける構成となっている。「時勢」という概念に拠って歴史の流れを見ようとしたものといえよう。弘化元年に川越藩において学問所博諭堂蔵版として「日本外史」が出版され、さらに嘉永元年には頼家で校正を加えた本が大坂で出版される。川越本・頼氏本ともに歓迎されて版を重ね、諸藩藩校で教科書として採用され、明治以降も数種の本が出版されている。「日本外史」は幕末から明治にかけて多くの読者をもった「歴史書」と云うことが出来る。したがって、後世の「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の「史実」理解はもとより、歴史叙述にもきわめて大きな影響を与えた。

山陽の「日本外史」とならんで、幕末の「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)理解に根本的な影響を与えたのは、後期水戸学の学統である。そのなかでも代表的著作となるのが、天保二(一八三一)年に刊行された水戸彰考館編修総裁川口長孺の「征韓偉略」全五巻である。ちなみに、刊行にあたって書肆(大坂・河内屋茂兵衛、江戸・北島順四郎、江戸・西宮弥兵衛)が掲げた「広告文」は当時の社会がこの著作をどのように位置づけようとしたのかを窺う手がかりともなると考えられるので、次にあげておく。

豊太閤の朝鮮征伐は我が日本の武威を外国に耀せし盛挙にして国史を修むる者、考究せずんばあるべからず、漢土・朝鮮の書、日本諸家の秘冊を以て一毫の私を加えず、年月・地理を推し、事実の次第・功の実否を考正したる、朝鮮征伐の実録なり

簡にして要をえた記事であるが、ここに記されたように「征韓偉略」は室町段階の日朝関係を略述したのち、「明史」「両朝平攘録」「懲毖録」「朝鮮征伐記」「太閤記」「豊臣秀吉譜」「歴代鎮西要略」「黒田家記」「鍋島家記」など当時としては「正統」と考えられた史籍・軍記類を明示的に引用しつつ、天正十四年から慶長三年にいたる間の外交・戦争の状況を漢文でまとめたものである。結果、きわめて権威ある「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)の著作として受け入れられることとなり、たとえば文政年間に編纂が開始された薩摩藩の「旧記雑録」にも関係箇所が引用されることとなる。

川口長孺の「征韓偉略」から程なく、やはり水戸彰考館の青山延光が「征韓雑誌」をまとめている(天保十年・一八三九年の序があり、このころの成立と考えられる)。こちらは様々な書籍から「朝鮮出兵」関係のエピソードを抜粋してまとめたものである。「翁物語」「碎玉話」「常山紀談」「津田家譜」などのほか朝鮮の義兵僧として著名な惟政に関わる「四溟堂集」などを出典としており、資料的には『征韓偉略』との重複をさせている。巻末の識語には「当時豊公自謂吾将平定韓明、奉天子駕于西土、又謂以我之智、行我之兵、如利刀破竹大水崩沙、何国不凶、以是言之、明人畏我如虎、朝鮮畏我如虎者不亦宜乎、嗟乎使豊公永年、則其必平定韓・明帰我版図矣、雖其不得遂志、然威靈遠被万方讐服者、其功固不可誣也」とあり、「神州武威之震于万国」した秀吉が途上で死去しなければ、朝鮮(韓)や中国(明)をその版図に組み入れていたであろうと述べている。これら両者に共通するのは秀吉の外征を「偉績」として讃える姿勢である。後期の水戸学は「治教一致」を旨としており、藩政の実態や現実の諸問題に対する関心の高さを特徴とする。ここから対外的危機意識が芽生え、攘夷思想の源流となっていくが、こうした思潮のなかで「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に対して非常に高い評価が与えられる事となる。そこには徳川体制を擁護するために、秀吉を非難するといった論理構成は認められない。

その後も水戸藩では「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)参陣の大家家に対し、事績調査を実施したようである。たとえば日向飴肥藩の伊東家に関わる「征韓偉勲録」の「序」には、「此一巻、天保十一年水府より(伊東)祐相公へ御内命有之候に付、落合敬助兼賡・安井仲平朝衡へ被仰付、御家来其外諸書の中にて、征韓の事のみを抜粋考証して、進せられし書の副本なり」と、みえる。こうした調査の反映であろうか、会沢安(正志斎)の「退食間話」には「豊太閤は朝鮮を伐て、威を海外に奮はれたり」とあり、また藤田東湖「弘道館述義」には「豊太閤の雄才大略もまた、海の内外を圧倒せり」といった具合に、その後の水戸学関係の著作には「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)への言及が散見されることとなる。

### Ⅲ 近代日本の成立と「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）

日露戦争のさなか一九〇五年に史学会から刊行された『弘安文禄征戦偉績』などに象徴されるように、戦前期の「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）研究が国威発揚の一翼を担われ、また現実問題としての「韓国併合」やアジア侵略に深く関わっていたという側面は否定できない。近代日本の成立期、「征韓論」に象徴されるように朝鮮半島を日本の侵略対象と見なすイデオロギーが台頭する。「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）の位置づけがこうした動きに相関しているであろうとの推定は容易になし得るのだが、この段階における専論も確認されていない。したがって残念ながら、明治の前半期「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）がどのような位置づけをうけていたのか、後考に俟つほかない。

管見の限りでいうと、近代日本における本格的な「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）研究は、朝鮮半島をめぐる日清間の対立を背景として勃興してくる。一八九三（明治二六）年刊行の木下真弘著『豊太閤征外新史』（青山堂刊行）はその嚆矢と考えられるものである。本書は巻一卷「起源」に筆を起し、「壬辰紀」から「戊戌紀」に及び、第十六巻の「後紀」からなる計画であった。いうまでもなく「壬辰」は文禄元年、「戊戌」は慶長三年にあたることから、前後七年にわたる戦役全般を対象としていた事がわかる。しかしながら、結果的に刊行されたのは「壬辰紀」のみであることから、計画は文禄元年のみで途絶したようである。明治期の刊行ではあるが、漢文体で書かれており、典拠史料は日本のものに留まらず、中国・朝鮮の典籍にも及ぶ。多様な在外史料を網羅した点は『豊太閤征外新史』の重要な特徴となっている。宮地正人校注『維新旧幕比較論』（岩波文庫、一九九三年）の著者として知られる木下真弘は肥後国菊池郡に生まれ、私塾古耕舎を開塾し、熊本藩の時習館で訓導を勤めた人物である。のちに教部省に出仕し、太政官・内務省等を経て、一八七九（明治一二）年修史館（従来の修史局が改組されたもの）に勤務する。さらに知音であった竹添進一郎が弁理公使として朝鮮に赴任するのにあたって、外務一等属としてソウルに至る。木下は甲申事変に関わって日本に帰還するまでの間、およそ二年間をソウルで過ごす。『豊太閤征外新史』の刊行はそれから一〇年ほど後のことであるが、「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）への関心は朝鮮時代に培われた可能性が高い。この書物は「前関白太政大臣豊臣秀吉欲征明、先遣兵入朝鮮」という書き出しからはじまっており、書名からも明らかなように、主たる交戦国は朝鮮ではなくあくまで明国であるという認識に基づく歴史叙述であった。

ついで、この翌年木下真弘の教えを受けた松本重愛によって『豊太閤征韓秘録』第壹輯が刊行される（成歓社、一八九四年）。この本は、いわば基礎史料集であり、第壹輯には「朝鮮征伐記」（堀正意著、部分）、「吉野日記」、「南大門合戦記」（天野源右衛門記）、「征西日記」の四編が収録されている。これ以外の諸史料についても、第貳輯以降で継続的に刊行していく予定であった。こちらにも計画的には途絶したものようで、第貳輯以降は確認されていない。それはともかくとして、本書刊行の意図はその緒言に明らかである。すなわち、「我邦むかしより遠征の師をいだししこと唯三回のみ」とし、「後陽成天皇の朝にいたり、豊臣太閤秀吉、明国を征せんとして、大軍を發し、朝鮮及び明軍を撃破せしことあり、之を第三回とす。而して太閤征韓の役たるや、その実、朝鮮を征伐せんとの意にあらずして、路を朝鮮に借り、將に支那四百余州を攻めとり、次いで歐羅巴をも併呑して、大に我が武威を宇内に輝さんとの大希望より起こりしものなりき」とする。欧羅巴併呑云々は時局迎合的な言い回しであるが、「征



韓」といいながら戦役の目的はあくまで明攻略に有ったことが確認される。さきの木下の著作とも共通する姿勢である。さらにこの時期史料集の刊行を企図する背景について、松本重愛は「今や東洋多事の日にあたり、日清韓の三国に重大なる関係を有する此歴史は吾人の普く知らんと欲するところなれども、古来此事を記すもの概ね杜撰粗笨にして其事実を誤るのみならず、確實なる材料を得ること甚だ難し」という認識を示し、「今日にあたりて、此歴史を研究せんとするものの材料に供し、併せて此偉大なる事業を普く世人に知らしめ、以て志気養成の一助ともなさばやとてなり」とする。説明には贅言を要しまいが、ちなみにこの緒言は「明治廿七年九月十七日 平壤大捷の報に接して」ものされたものであった。

このように近代日本における「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)研究の嚆矢は、上記のように、まさに日清の対立という現実を前に開始された事がわかる。これに象徴されるように、昭和戦前期に至る「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)研究は現実の政治・外交問題とおおしく関わっていく事になる。したがって、多くの研究成果は当時の歴史認識や世界観を前提として叙述されたものであり、今日からみると問題とすべき点も多い。こうした相関性については今後の研究によって十分に検証されていくべきではあるが、この時期に行われた池内宏氏や中村栄孝氏の「実証」的研究は現在なお有益である。このほか、伴三千雄氏による城郭研究、戦後につながる黒田省三氏の研究、派兵の目的を勘合貿易の復活に求める議論を否定した田保橋潔氏の指摘(「壬辰役雑考(第一回)」、『青丘学叢』第一四号、一九三三年)などがある。また、同じく『青丘学叢』を中心に朝鮮半島におけるキリスト教の展開を論じた山口正之氏の研究はいち早く朝鮮人被擄人にも注目している。さらに、対馬宗家文書の現状に鑑みると、豊臣政権に関わる宗家文書を紹介した武田勝蔵氏の研究を忘れるわけにはいくまい(「伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣」、『史学』第四卷第三号、一九二五年・「宗家文書の中より」、『史学』第五卷第三号、一九二六年・「宗家文書より(二)」、『史学』第五卷第四号、一九二六年)。また、蘇峰徳富猪一郎氏の『近世日本国民史 豊臣氏時代 朝鮮役』や参謀本部編にかかる『日本戦史 朝鮮役』などは史料批判などに多くの問題を残しつつ、戦争に対する網羅的把握・具体的史実の析出という点で、今日なお他を圧倒するものがある。かなり乱暴ではあるが、戦前・戦中期にすすめられた一連の研究は国家主義的な傾向と「実証主義」的な傾向を二つの軸としながら進められていったと考えられる。また、各論的な研究においても、概括的ではあるにせよ今日に続く問題点の提示もかなりなされているようにも感じられる。

\*たとえば三鬼清一郎氏は朝鮮史編修官の履歴を有した中村栄孝氏の研究が朝鮮総督府の修史事業や教育行政と不可分なかたちで進められたことについて十分な顧慮がなされるべきであると指摘される(「朝鮮役研究史の一齣—中村栄孝氏の業績をめぐって—」、三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館、二〇〇〇年)。

#### IV 敗戦以降八〇年代にいたる研究動向

敗戦後は従前の実証研究を継承しつつ、戦後歴史学の潮流のなかで新たな視点が導入される。ひ

とつの典型は一九五四年に岩波新書として刊行された鈴木良一氏の『豊臣秀吉』であろう。すなわち、そのあとがきにはつぎのように述べられている。少し長くなるが、引用しておこう。

ただいくぶんでも慰められるのは、朝鮮民族の歴史に一ページを書き加えることができたことである。侵略者の子孫であり、侵略者自身であった私たちに、朝鮮民族の苦しみがわかるものではない。ただ侵略の歴史が書けるだけであり、また書くべきだと思う。それを書くことは、実は侵略することによってわが身自身を墮落させ、そしていま逆に独立をうばわれ傷つけられている私たちにとって、救いであり、日本の歴史家の厳しくも楽しい義務であると思う。

鈴木の記事はさらに、『文禄慶長の役』の研究はあっても、侵略と抵抗の歴史を見いだしえなかったことは悲しいが、本気にそれを書いてみようと思いつことのできたのは、私にとって予期しなかったよるこびである。」と続く。戦前の研究成果を「『文禄慶長の役』の研究」と一括しつつ、そこでは「侵略と抵抗」といった観点が抜け落ちていたことを鋭くついている。実際、本書ではかなりの頁をさいて「朝鮮侵略」の過程が詳述されており、朝鮮王朝や明軍の内部に分け入った記述もなされている。

さて、この前年一九五三年に提起された安良城盛昭氏の問題提起に端を発する「太閤検地論争」、さらに幕藩制の「構造的特質」が議論されるなかで、「朝鮮侵略」は豊臣政権論・統一政権論の要として研究が進められることになる。六〇年代の研究動向を瞥見すると、たとえば、朝尾直弘氏は豊臣政権の構造的矛盾が「大陸出兵」を必然化させたと述べ、佐々木潤之介氏は豊臣政権の全政治過程は「朝鮮侵略」と密接に関連していたと意義付けている。また、山口啓二氏は豊臣政権が全国を蔽う封建国家権力として存在したことを構造的特質の第一としてあげ、自らの権力を維持するうえで諸大名への「際限なき軍役」の賦課が不可避であり、戦争状態を前提とする「際限なき軍役」が統一戦争終了後、海外侵略に向けられるのも必然的動向であると説いた。山口氏は幕藩権力における編成原理の本質を知行・軍役関係に求めるが、この点については三鬼清一郎氏が「朝鮮役における軍役体系について」（『史学雑誌』七五編二号、一九六六年）で豊臣・徳川の間には格差を見いだす佐々木氏の「軍役論」を否定し、「朝鮮役」を契機として統一的封建的軍役体系が全領主階級を包摂して達成されたとした。「日本近世史」研究が幕藩制構造論、それに続く国家論という潮流に規定されたため、「文禄・慶長の役」（壬辰倭乱）研究もそれを不可避なものとした構造分析に重点が置かれることとなった。ここで議論されたのは抽象的な軍役の体系としての「朝鮮侵略」であり、研究は鈴木が意図したような方向には必ずしも進まなかったといえよう。

つづく一九七〇年代には、この大陸侵攻を当時の国際関係のなかで捉え、アジア史的・世界史的な位置づけを試みようとする研究動向がはじまる。六〇年代に引き続き山口啓二氏・佐々木潤之介氏・朝尾直弘氏・三鬼清一郎氏らの研究が規定的であるが、ここに至るうえで旗田巍氏や石原道博氏などの東洋史研究者、戦前期から継続する中村栄孝氏、さらに中世日本の対外関係史とりわけ対馬を意識した日朝関係の分析に尽くした田中健夫氏（『中世海外交渉史の研究』、東京大学出版会、一九五九年・『中世対外関係史』（東京大学出版会、一九七五年）らの労作は大きな役割を果たしている。

さらに、一九七五年小学館版「日本の歴史」のシリーズとして藤木久志氏の『織田・豊臣政権』が著された。西ヨーロッパ植民帝国の進出も加えて激動する東アジア世界のなかの民衆にとって、一向一揆と統一権力、統一と侵略とは何であったのかという問いかけのもとにこの通史は叙述され、朝鮮侵略の

もつ深刻な実態を多面的に描き出している。同年に刊行された同じシリーズの朝尾直弘氏の『鎖国』は元和期以降を対象とするものであるが、近世日本を東アジア史のなかに位置づけ「日本型華夷秩序」の成立を論じたという点でその後の研究にも非常に大きな影響を与えた。さらに翌七六年には内藤雋輔氏の『文禄・慶長の役における被擄人の研究』が刊行されている(東京大学出版会、一九七六年)。内藤氏は「序」で「豊臣秀吉の文禄(壬辰)・慶長(丁酉)役の本質とその影響とについては、すでにいろいろの論考がなされているが、しかし政治や外交・軍事などに関する問題の外に、この戦役が両国民衆に与えた最大の苦悩は戦争による生活の破壊であったと考えられる」と関心の所在を述べて、朝鮮人・日本人被擄者の諸相を描き出し、同時に豊後国臼杵安養寺の従軍僧慶念の日記を紹介して研究の新たな地平を切り開いた。さらに、歴史学研究会は一九七七年度の大会テーマとして「民族と国家」を掲げ、総合部会で北島万次氏の「秀吉の朝鮮侵略と幕藩制国家の成立」、矢沢康祐氏の『「壬辰倭乱」と朝鮮』の報告が行われた。北島報告の基調は内藤氏の著作等をふまえ、朝鮮民族に圧迫を加えた侵略戦争を通じて、日本の封建領土制はそのヒエラルヒーを固め、究極的には日本民衆に対する支配体制を強化した、というものであり、一方矢沢氏は「壬辰倭乱」期を通じて朝鮮社会の構造的変化、身分的秩序の変動が大きく進んだことを論じ、「壬辰倭乱」の経験が十八世紀以降の自立思想の形成に大きな役割を果たしたとする。

七十年代の後半にはじまるこれらの研究はかつて鈴木良一が主張した「侵略と抵抗の歴史」に迫るものであり、同時に戦役そのものを主題とする次の研究段階へ向けての移行を準備するものとなった。また、この時期は倭城址研究会などによって朝鮮半島南部に残存する日本型城塞の踏査などが進められ、その成果は七九年に報告書『倭城Ⅰ』として公にされ、今に至る「倭城」研究隆盛の嚆矢となる。現地踏査が必ずしも容易ではなかったため、遺跡・遺物から戦争の実態に迫るといふ考古学的手法は敗戦後の途絶を余儀なくされていたわけであり、そうした意味からも報告書『倭城Ⅰ』の研究史にしめる位置には大きなものがある。

\* 朝鮮半島に築かれた日本型城郭、いわゆる「倭城」については戦前期に小田省吾氏や伴三千雄氏などによってすでに一定の「成果」をあげていた。こうした戦前期の研究状況と問題点については、福島克彦「戦前の倭城研究について」(城郭談話会編集・発行『倭城の研究』創刊号、一九九七年)にまとめられている。戦後は一九六一年に釜山大学校内韓日文化研究所がまとめた『慶南の倭城趾』などが知られていたが、日本側ではこの報告書『倭城Ⅰ』以降、研究の隆盛を見るにいたる。その後の主立った研究成果のみをあげると、一九八五年に佐賀県教育委員会が『文禄・慶長の役城跡図集』をまとめ、城郭談話会編集・発行による『倭城の研究』が創刊号から第五号までを数え(一九九七～二〇〇二年)、最近では白峰旬『豊臣の城・徳川の城—戦争・政治と城郭—』(校倉書房、二〇〇三年)や黒田慶一編『韓国の倭城と壬辰倭乱』(岩田書院、二〇〇四年)などが刊行された。また、一九九八神戸大学文学部が『韓国慶尚南道倭城趾の調査報告』を出し、高瀬哲郎氏らが主導した佐賀県立名護屋城博物館の継続的な研究もある。

八〇年代にはいと、北島万次氏によって『朝鮮日々記・高麗日記—秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発』が公刊される(そしえて、一九八二年)。書名にある「朝鮮日々記」とは内藤雋輔氏が紹介された慶念の日記、「高麗日記」は肥前の田尻鑑種が遺した第一次侵略の際の記録である。こうした書名か

ら明らかなように、北島氏の著作は戦争の過程そのものを文書・記録によって忠実に記述しようとしたものである。さらにその副題からも明らかなように、かつて鈴木良一氏が提唱した「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)研究における第三軸を明確に意識したものと位置づけられる。

翻ってみると、六〇年代・七〇年代の研究によって、政権論・幕藩制構造論をかたちづくる上で「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)は不可欠の構成要素となりその意義付けが模索されてきたが、戦争そのものに関する歴史叙述は必ずしも豊富ではなかった。たとえば、旧版の岩波講座『日本歴史 近世1』(岩波書店、一九六三年)に収録された朝尾直弘氏の「豊臣政権論」はその後の研究動向におおきな影響を与えた好論であるが、実はそこに「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に関する言及はほとんどない。この時期の研究状況を象徴するかのごとく、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)というファクターを欠いたまま、豊臣政権論が定立されていたわけである。朝鮮史研究の分野で義兵や朝鮮民衆にスポットを当てた研究が盛んに進められていたことや中国史の岡野昌子氏が戦争の勝敗や進入経路の考証、指揮官の動向などではなく、一般の兵士や民衆の視点から具体的にこの戦争を採り上げようとしたことなどと対照的であったといつてよかろう。藤木久志氏の言葉をかりれば、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)はながらく「豊臣政権論の添え物の位置」にあったといえよう。ちなみに、八〇年代の後半には朝尾直弘氏の『天下統一』(体系日本の歴史8、小学館、一九八八年)が刊行される。七五年の『鎖国』に先行する時期を対象とするが、ここで「日本型華夷秩序」を下支えするものとして「武威」の存在が指摘され、秀吉の対外強硬路線も「武威」の発露として位置づけられることになる。

いずれにしろ、内藤氏や北島氏による戦争史叙述によって戦後の「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)研究には新たな局面が開かれたといつてよい。さらに、あらゆる意味で大陸侵攻の基盤となった九州を対象として森山恒雄氏の『豊臣氏九州蔵入地の研究』もまとめられ(吉川弘文館、一九八三年)、また藤木久志氏は『豊臣平和令と戦国社会』のなかで豊臣政権における東アジア外交の重層性を指摘し、それ前提とした朝鮮侵略の位置づけを試みている(東京大学出版会、一九八五年)。ここで藤木氏は、秀吉は明や南蛮を対等の交易国とする一方で、朝鮮や琉球さらには台湾・フィリピン(小琉球)を国内の大名に準じる「惣無事令」の対象つまり服属国と位置づけたとして、豊臣外交が二元的・重層的に展開したと論じている。かつて大陸侵攻の意図をめぐって勘合貿易復活説と領土拡張説とが二者択一的に論じられる時代があった。もとより現状はそうした短絡的な態度を許すものではないが、藤木氏の指摘はこうした閉塞感を打破する手がかりを与えたともいえよう。幅広く東アジア史の視点から、戦役の意義を問い直そうとする上垣内憲一氏による通史『空虚なる出兵 秀吉の文禄・慶長の役』も一九八九年に著された(福武書店、一九八九年)。

さて、八〇年代に進められた豊臣政権研究の刺激的成果が、相次いで一冊の書物として刊行されたという点で一九九〇年は画期的な年であった。すなわち、高木昭作氏の『日本近世国家史の研究』(岩波書店)、山本博文氏の『幕藩制の成立と近世の国制』、北島万次氏の『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』(ともに校倉書房)などである。高木氏の著作は大陸侵攻を正面に据えたものではないが、これと密接にかかわる「惣無事令」やいわゆる「身分統制令」、近世的軍団編成のありようを論じ、山本・北島の両氏の著作は豊臣政権下の島津氏領国の実態にせまるものであった。

## V 関心の多様化と問題点

「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)研究はすでに政権論の「添え物」ではない。とりわけ、九〇年代以降は北島万次氏の仕事に導かれるかたちで関心も多様化し、戦役の推移はもちろんのこと、兵站補給、講和交渉、「倭城」、降倭・義兵・被擄といった朝鮮社会に関わる諸問題など、戦争のもつさまざまな側面について実証的な研究が進んだ。『共同報告書』に収められた学説史の整理および文献目録が雄弁に物語る通りである。『共同報告書』刊行後における特筆すべき研究としては太田秀春氏の『朝鮮の役と日朝城郭史の研究』(清文堂、二〇〇五年)と津野倫明氏による一連の研究をあげなければならない(「文禄・慶長の役における毛利吉成の動向」、高知大学『人文科学研究』九号、二〇〇二年・「慶長の役における長宗我部元親の動向」、黒田慶一編『韓国の倭城と壬辰倭乱』所収、二〇〇四年・「慶長の役における黒田長政の動向」、『海南史学』四二、二〇〇四年・「慶長の役における鍋島氏の動向」、『織豊期研究』八、二〇〇六年・「朝鮮出兵における鍋島直茂の一時帰国について」、高知大学『人文科学研究』一三号、二〇〇六年など)。前者は日朝間に展開する城郭意識や日本の軍勢と朝鮮社会との交流といった、これまでにない斬新な切り口からこの戦役を考えようとしたものである。研究手法としても朝鮮側史料の積極的な活用が注目され、村井章介氏の「朝鮮史料から見た「倭城」」(『東洋史研究』六六一二、二〇〇七年)などとともに後学の研究スタイルにも大きな影響を及ぼすことになるであろう。一方、津野氏については「慶長の役」(丁酉再乱)についてかなり詳細な史実を明らかにした点が大きく評価される。「文禄の役」に比較すると研究の薄かった「慶長の役」研究は朝鮮日々記研究会編『朝鮮日々記を読む 真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略』(法蔵館、二〇〇〇年)によって格段に豊かなになったが、これに津野氏の実証的研究が加わることでより充実してきている。

このほか、曾根勇二氏は豊臣家奉行人の動向に注目しながら、「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)に関わるトピックを扱い(『近世国家の形成と戦争体制』、校倉書房、二〇〇四年)、中野は秀吉の朱印状を「定点」的に分析する方法で豊臣政権による戦略の体系化を試みている(『秀吉の軍令と大陸侵攻』)。最新の研究として採り上げるべきものは他にもあるが、紙幅の関係もあるので、ひとまず上記の研究をあげるにとどめる。

さて、『共同報告書』では「今後の研究課題」として六つの論点を提示した。今日なおこれらが期待される研究課題であることはいまでもないが、それぞれの論点は必ずしも同一の次元にはない。1から4の課題は戦役それ自体に関わるものであり、5は戦略、6はむしろ政治としての広義な「戦争」に関わっているといえよう。拙著でも述べたが、私見ではまずこれらの意識的な弁別が計られるべきではないだろうか。そうした前提の上で、たとえば「6 東アジアの国際秩序」について付言すると、戦闘の終息と戦争の終結とを同次元に論じることの問題点が指摘される。その意味で、李啓煌氏の『文禄・慶長の役と東アジア』は戦闘終了後の国際関係を詳細に論じた非常に貴重な業績といえる。これに学びつつ、中野は『文禄・慶長の役』(戦争の日本史16、吉川弘文館、二〇〇八年)をまとめているので、詳細はそれに譲りたい。また、『共同報告書』の「今後の研究課題」に言及のなかった論点として琉球と朝鮮との関係を指摘しておきたい。たとえば、一九九八年に刊行された邊土名朝有氏『琉球の朝貢貿易』(校倉書房)には「明実録」など中国側史料に基づく戦役・講和交渉の推移を述べた論稿が収められており、

継承すべき重要な論点といえよう。

\* 会議報告後に、明石書店から鄭杜熙・李璟珣編著『壬辰戦争』の日本語版(金文子監訳・小幡倫裕訳)が刊行された。ある意味で「文禄・慶長の役」(壬辰倭乱)研究の今日的到達点を示すものといえよう。本書所収のウィレム・ブート氏論考については個別的にふれたが、大部なものでもあり全般的な論究は別の機会に譲らざるを得ない。

## 主な参考文献

近世の著作については史籍集覧や日本思想大系などの叢書類に収められているものを参照されたい。近代以降の研究成果について本文において基本データをあげているので、以下のリストは単行本を中心にする。

- 木下真弘 『豊太閤征外新史』(青山堂、一八九三年)
- 松本愛重 『豊太閤征韓秘録』(成歎社、一八九四年)
- 史学会編 『弘安文禄征戦偉績』(富山房、一九〇五年)
- 池内宏 『文禄・慶長の役』正編第一(南満州鉄道株式会社、一九一四年)
- 徳富猪一郎 『近世日本国民史 朝鮮役』(民友社、一九二一～二二年)
- 参謀本部編 『日本戦史 朝鮮役』(偕行社、一九二四年)
- 池内宏 『文禄・慶長の役』別編第一(東洋文庫、一九三六年)
- 中村栄孝 『文禄慶長の役』(大日本戦史3、三教書院、一九三九年)
- 鈴木良一 『豊臣秀吉』(岩波新書、岩波書店、一九五四年)
- 石原道博 『文禄慶長の役』(塙書房、一九六四年)
- 日本思想史研究会編 『日本における歴史思想の展開』(吉川弘文館、一九六五年)
- 中村栄孝 『日鮮関係史の研究』中(吉川弘文館、一九六九年)
- 山口啓二 『幕藩制成立史の研究』(校倉書房、一九七四年)
- 内藤雋輔 『文禄・慶長の役における被擄人の研究』(東京大学出版会、一九七六年)
- 三鬼清一郎 「小宮山楓軒と朝鮮役」(『茨城県史研究』四〇号、一九八一年)
- 三鬼清一郎 「江戸時代における朝鮮役の評価について」(『歴史評論』三七三号、一九八一年)
- 北島万次 『朝鮮日々記・高麗日記』(そしえて、一九八二年)
- 森山恒雄 『豊臣氏九州蔵入地の研究』(吉川弘文館、一九八三年)
- 藤木久志 『豊臣平和令と戦国社会』(東京大学出版会、一九八五年)
- 鄭樑生 『明・日関係史の研究』(雄山閣、一九八五年)
- 北島万次 『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』(校倉書房、一九九〇年)
- 山本博文 『幕藩制の成立と近世の国制』(校倉書房、一九九〇年)
- 崔官 『文禄・慶長の役』(講談社メチエ、一九九四年)
- 李啓煌 『文禄・慶長の役と東アジア』(臨川書店、一九九七年)
- 邊土名朝有 『琉球の朝貢貿易』(校倉書房、一九九八年)
- 中野等 『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』(校倉書房、一九九九年)
- 朝鮮日々記研究会編 『朝鮮日々記を読む 真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略』(法蔵館、二〇〇〇年)

- 黒田慶一編 『韓国の倭城と壬辰倭乱』(岩田書院、二〇〇四年)  
太田秀春 『朝鮮の役と日朝城郭史の研究』(清文堂、二〇〇五年)  
中野等 『秀吉の軍令と大陸侵攻』(吉川弘文館、二〇〇六年)  
中野等 『文禄・慶長の役』(戦争の日本史16、吉川弘文館、二〇〇八年)  
太田秀春 『近代の古蹟空間と日朝関係』(清文堂、二〇〇八年)  
鄭杜熙・李璟珣編著 『壬辰戦争』(金文子監訳・小幡倫裕訳、明石書店、二〇〇八年)